

146号

7月例会はお休みです。

今年の活動を振り返ってみましょう。

- 1月 武生ルネサンス総会、新年会(旧家で鬨酒会：麦酒と焼酎)
- 2月 ワイン部門鬨酒会
- 3月 越前府中まちなか博物館めぐり
- 4月 村国山散策、花見
- 5月 怪奇骨董音楽館見学
- 6月 鮎と残り蛍観賞

こうして思い起こしますと、今年は1月から6月まで、飲んだり食べたりしながらたわいもないことを話して楽しむ例会でした。しかし、感性の似ているもの同士、こういう時間を共有できることこそ、武生ルネサンスの原点のような気がします。さあ8月は何をして遊びましょうか？

先月の例会は鮎解禁を待って、隠れ里に鮎を食べに行きました。昨年の洪水の影響で、日野川に鮎が少なく、出席者31名が満足できる鮎が果たして獲れているだろうか、いささか心配しながら訪ねましたところ、いろいろな鮎料理を出していただいたもののやはり天然モノとはかなり遠い味。蛍も2つ3つばかり。何物にもこだわりの強いわが会としてはかなり期待はずれでしたが、みんなで相乗りして出かけ、わいわい楽しんだのですから、まあ良しとしましょう。

鮎を食べる会で「炭焼き窯の中で茶会をする」という、公会堂での企画展「探美」の続きのような提案がありました。面白そうなことには極めてノリのいい会員たち。やろうやろうと意見が纏まり、その時手を挙げた15人ほどが早速7月3日に「探美」を実行しました。場所は今庄の奥小倉谷。戦後ずっと炭焼きを続けてこられて85歳になられる窯主も、炭焼きの体験学習かと思いきや、窯の中に花を生ける、蠟燭を立てる、お湯を沸かして釜をしつらえるなどの「今利休」ぶりが始まって、驚いておられました。

窯の入り口はまるでにじり口。中は暗くて最初はほとんど見えませんでしたが、目が慣れてくると蠟燭の明かりで、天井の土を固めた筵のあとや、

釉薬のかかったレンガがぼうっと照らし出され、まさに幽玄の世界。誰かが「陰影礼賛」の話をしていましたが、確かにその通りでした。千利休が最後に考えていた茶室は楕円形の茶室だったといいますが、さすがの利休も炭焼き窯の茶室には考えが及ばなかったようです。これは世界でも初めての試みでしょう。今年10月の国民文化祭の折、こういう茶会を催したら面白いでしょうに。

平成8年に武生ルネサンスが蒔いた「武生・遠別の交流」種は神山地区の人の手でしっかり育てられていて、小学生の交流会を続けておられます。今年は武生から遠別へ出かける年で、7月26日から4日間、神山小学校の児童12人が、北海道の北端遠別町に出かけるそうです。今から10年以上前、遠別は武生の池の上、広瀬からの開拓団によって作られた町です。今尚多くの武生弁や、越前の名も残っていますし、町長さんはじめ、議員さんにも武生出身の方が沢山おられます。

来年の『絵暦』は巨大なビオトープの第二弾として、村国山と周辺の山々の写真を季節ごとに河合俊成さんに撮ってもらっています。

武生ルネサンスのホームページに掲載している「リレーエッセイ」から今回は加藤博一さんの文を同封します。